

エッセイ

三瓶先生と三瓶さん

近 藤 あずさ (旧姓 藤嶋)

東京・南麻布のドイツ連邦共和国大使館に勤務するようになり 20 年余りが過ぎました。三瓶愼一先生と御父上、三瓶雄造さんとの出会いが無ければ有り得なかったことです。心からの感謝とともに、先生そして三瓶さんとのご縁を振り返ってみたいと思います。

先生との出会いは 1992 年、私が法学部法律学科に入学した時に遡ります。現在のドイツ語インテンシブコースの前身である F 組は「法学部ドイツ語学科」とも言うべき充実したカリキュラムで、法律に加えドイツ語も集中的に学ぶことができる、夢のような環境でした。

法学部に入学したのに、なぜドイツ語までこんなに？との声もありましたが、その意義を語る先生の声と眼差しは熱を帯びていました。また、先生のお話しになるドイツ語は、ドイツ人に母語話者と間違えられるほど流暢。明るく良く通る声でドイツの歌を歌われる時、教室は美しい響きで満たされました。

そんな先生に導かれ、日吉では受験勉強ではない、本当に学びたいことを学ぶ幸せな学生時代を過ごしました。大学入学までドイツに縁の無かった私にとり、先生や NHK ドイツ語講座でお馴染みだったフラオケ・ヴロスト先生の授業がある日は、日吉駅前から校舎に続く銀杏並木がドイツに通じているかのよ

うに感じられたものです。

先生は学外でもドイツ語教育に熱心で、月刊誌『MD基礎ドイツ語』（三修社）ではカセットテープの音声教材を担当されていました。発音・聞き取りに苦心する初学者として私も出演させていただき、編集部やドイツ人の方々と様々なアイデアを出し合ったり、読者の方々からの葉書に綴られた感想を元に改善を試みたりするなかで、ドイツ語教育法の向上を目指す先生の絶え間ない創意工夫や、人望の厚さを目の当たりにしました。

それは毎年春に土肥、夏に白馬で開催された合宿「ドイツ語・ドイツ文化ゼミナール」でも同様でした。日独のドイツ語講師や留学生の方々のご協力のもと、様々な大学・学年の学生が5日間にわたり集中的に学びを深めるという機会は、先生のドイツ語教育に懸ける情熱と幅広い人脈に加え、驚異的な体力があって初めて成立するものでした。

当時、同ゼミナールは20回を優に超す恒例行事となっていました。25回目を迎えようとする頃、先生から、ロータリー財団の奨学制度を活用してドイツに留学してみても、とのご提案がありました。まだ日吉の学生だった自分は、ドイツ語に自信がなかっただけでなく、卒業後の進路が定まっていない段階での留学を想像できず、逡巡するばかりでした。それにもかかわらず先生は、20歳で留学することの意義を繰り返し強調され、応募締切直前に実施された土肥の合宿では、実に粘り強く出願を勧めてくださったのでした。

ロータリー財団を通じた留学では、応募から帰国まで一貫して先生の御父上、三瓶雄造さん（以下「三瓶さん」）にお世話になりました。三瓶自動車株式会社代表取締役として、松戸中央ロータリークラブの会員でいらっしやった三瓶さんは、三つ揃いのスーツをいつも上品に着こなし、一学生に過ぎない私に対しても大変丁寧に接してくださる、紳士中の紳士でした。同財団の国際親善奨学生になるには、地域のロータリークラブに在籍する推薦人が必要となると

ころ、三瓶さんをご快諾くださったうえ、数次にわたる選考試験や合格後のオリエンテーション等、留学開始までの1年間に十数回実施された関連行事にも、悉くご同行くださいました。

三瓶さんが他界されて20年目の去年、先生から伺ったことですが、三瓶さんが起業された当時、自動車の供給元は進駐軍将校の払い下げしかなかったそうです。自動車販売は、今で言えばヘリコプターを売るようなもので、顧客の顔を見て話を聞き、最大限希望に合う車を探してくるというお仕事、それも当時の顧客名簿には歌舞伎役者や大企業の会長クラスの方々が名を連ねていたとのこと。先生は幼い頃、三瓶さんが毎晩のように違う車で帰宅するので、朝起きると車庫にどんな車があるのか、わくわくしながら見に行かれたのだそうです。

当時の車はよく故障するものでもあったようで、道中で調子が悪くなると三瓶さんがボンネットを開け、ガソリンの気化量をコントロールするキャブレターの微妙な調整を試みたり、顧客が休暇中に箱根の山道で立ち往生した際には、家族の夏休みを返上したうえ、工具を積んで現地に急行したりということもあったそうです。先生と三瓶さんは、一見全く違うタイプなのですが、こうした逸話からは、進取の気性と人情に厚いという共通点がはっきりと見て取れます。

お二人ともお忙しかったはずなのに、学生相手に本当に良くしてくださいました。留学を根気強く勧める先生の熱弁、離日時に成田空港まで見送りに来てくださった三瓶さんの温かい眼差しは、今も脳裏に焼き付いています。

手元には三瓶さんからのお手紙が複数残っています。事務連絡から激励のお言葉まで、三瓶自動車の社名やマークの入った便箋が、力強い達筆で埋め尽くされています。また、先生からのお手紙は、当時まだ珍しかったMacintoshのPCを使って作成されたものが主で、留学に二の足を踏む自分の長所・短所の

ご指摘や、ドイツ語力向上のための具体的なご提案等、一学生の躓きの原因を的確に取り除く教育者の観察眼に貫かれていました。

三瓶さんと奥様、そして三瓶先生とのお手紙のやりとりは、今のメールの何倍も気を遣うものでしたが、形式や内容、筆跡に至るまで完璧なお三方との文通で鍛えられた日本語の力が、大使館勤務に繋がったように思われてなりません。その一例に、採用試験で翻訳課題の一つとして出された、当時のヨハネス・ラウ大統領による皇室宛て書簡が挙げられます。愛子さまのご誕生を祝う内容でした。皇室に宛てて手紙を書いたことなどもちろんない私は狼狽えましたが、お三方のお手紙に範をとりながら、何とか訳上げました。

大使公邸の一室で丸一日をかけて行われた筆記試験の後、参事官や大使との面接を経て奇跡的に採用されたものの、実務レベルには程遠いドイツ語力を自覚していたため、後日、担当者に採用の背景を尋ねました。それによると、採点に関わった外部の日本人有識者の方が、私の和訳の答案を高く評価してくださったとのことでした。そしてドイツ語力については、大使館内にドイツ人が多くいるのだからそれほど重視しなかった、とも。日本語でもドイツ語でも未だに苦勞は尽きませんが、三瓶先生と三瓶さんご夫妻への感謝の念もまた、尽きることはありません。

大使館職員としては、その後何度か三田を訪れる機会に恵まれました。特に印象的だったのは、2016年5月に行われた清家篤塾長とヨハンナ・ヴァンカ連邦教育研究大臣との会談です。ヴァンカ大臣は、G7伊勢志摩サミットに先立ちつくばで開催されたG7科学技術大臣会合に出席後、北館ホールでの講演「ドイツが目指す学術研究の国際化」を前に、清家塾長との会談に臨まれました。

逐次通訳の最中は、日独双方向での聞き取り・メモ・訳出の連続で息つく暇も無く、会談内容はあまり記憶に残っていないのですが、その分、塾監局会議

室からの眺めや図書館旧館の内部等、学生時代には足を踏み入れたことのなかった場所の視覚的な印象が強く残っています。十数年ぶりに三田の山を訪れたことで、三瓶先生の講座の他、ドイツ法に造詣の深い宮澤浩一先生のゼミや井田良先生の演習等、知的刺激に溢れた日々が鮮やかに蘇りました。三瓶先生と法学部物理学教室の藤田祐幸先生のお力添えのもと、ドイツ・ヴァッカーズドルフにおける核燃料再処理工場建設中止を記録した映画『核分裂過程 (Spaltprozesse)』の上映会を開催した時のことも、懐かしく思い出されました。

2019年2月のアンゲラ・メルケル首相訪日時には、三田での学生対話が実現しました。私は別の行事に配置されていたため残念ながら参加できませんでしたが、当時の様子は、三瓶先生が講演を翻訳し、解説を加えられた『三田評論』2019年6月号の特別記事「メルケル首相、塾生と語る」に詳しく記されています。

早稲田大学法学部に学ばれた三瓶先生が、縁あって塾法学部で教鞭を執られたことは、私にとり幸せな巡り合わせでした。先生があれほど熱心に留学を勧めてくださったのは、先生が早大3年生の時に、ドイツ語学とドイツ語教育を学ぶためミュンヘン大学に留学されたことが背景にあったかと思われます。当時、学部生が留学するうえでほぼ唯一の奨学制度だったというサンケイ・スカラシップの選考では、面接官を務められた宮澤浩一先生とのやりとりが大変印象的だったと伺ったのは、私が宮澤先生の研究会に入会した後のことでした。

また、私のドイツとの出会いは、中学3年生の夏休みに読んだ『ミュンヘンの中学生』が最初でしたが、この本の著者、子安美知子早稲田大学教授が先生の早大時代の恩師の一人であり、白馬での合宿は、元を辿れば若き三瓶先生が子安教授の薫陶を受けた場であったと知ったのも、ごく最近のことです。ある時、先生が子安教授の恩に報いようとする教授は「それはあなたの後から来る人にしてあげなさい」とおっしゃったそうです。その恩恵に浴したのが、私

を含む塾法学部ドイツ語インテンシブコースの学生たちであることに、間違いはないでしょう。

同コースは、先生が学生時代に切望した全てを盛り込んだ、理想的なドイツ語の学びの場です。国際ドイツ語教員連盟の副会長として、言語学習・言語教育の社会的な意味を考えつつ、世界各地でドイツ語教育の支援拡充に尽力されてきたことの結晶です。今やその歴史は30年を超え、先生の還暦を祝う会にも、ドイツ関連の様々な分野で活躍する教え子たちが多数駆け付けました。

今後は長野・茅野で晴耕雨読の日々と伺っています。翻訳をはじめ、山の樹の手入れ、畑仕事、溪流釣り、山登り等々、以前にも増してお忙しいものと思われませんが、これからもぜひ私たち後進をお導きください。三瓶先生と三瓶さんから受けたご恩に報いることは到底叶いませんが、せめて後に続く人の一助となることができるよう、努めてまいります。